

第 1 章 実践研究の主題

人類が長い歴史の中でかちとり、培い、育んできたもの、それが基本的人権である。しかし、人権は普遍性を持つにもかかわらず、永遠不変のものではない。時に権力によって、人間の内部にある弱さのために、あるいは社会全体の大きな流れに流されて、その他様々な条件によって、人権は脅かされる。

自由な自己表現、差別のない平等な人間関係、などと理想を掲げることは簡単である。しかし、それらを具体的に実現していくことは非常に困難である。社会の歪みは特に社会的弱者や少数者に顕著に現れる。学校をはじめとして社会全体に蔓延している「いじめ」、青少年から高齢者まで益々増え続ける「自殺」、他人はおろか親子や兄妹・夫婦の間でも繰り返される「殺傷事件」等々、人権がないがしろにされている事例は枚挙にいとまがない。

人権は常にひとりひとりの不断の努力によって生まれなければならない。

教育機関の役割は、人権の尊重を御題目のように唱えることでは決してない。具体的に人権を尊重できる人間を育てること、それこそが私たちの使命であろう。では、いかにして人権を尊重できる人間が育つのか。

他者を大切にすることは、自分自身を大切にすることが基礎となる。自らの尊厳を実感することは、周囲の人々の尊厳を感じることにつながる。それは、頭で理解しているからといって、必ずしも実行できるものではない。大人が言葉を通して子どもたちに教えることのできるものでもない。乳幼児期からの様々な体験の積み重ねによって、子どもたち自身が自分の感性を養いつつ、身につけていくべきものである。

子どもたちの年齢や精神的な発達段階によって、私たちがどのように彼等に働きかけていくか、その内容は変化していく。しかし、その中でも最も重要であり、人権を育み実現させていく基盤となるのが、乳幼児期の生活教育環境にある。

自然と親しく関わり、感性を豊かに育むこと。たくさん子どもたちや大人たちと親しく関わり合い、幅広い人間関係の中から、他者のありのままを受け入れ、自分自身を見つめ、受け入れ、自他共に尊重していくこと。これらは、乳幼児期にこそ必要不可欠な体験である。そしてこれらこそが人権教育の揺るぎない基盤となると確信している。

札幌トモエ幼稚園（以下トモエと記す）では、乳幼児とその家族を中心に、この報告書に記す諸観点をひとつひとつ研究しつつ実践してきた。これらの研究実践は、人権教育の最も重要な基盤となるものであり、ゆえに基礎的人権教育という。

以下は、基礎的人権教育の実践研究の主題である。

（１）この実践研究は、木村仁が幼稚園園長に就任した１９６９年４月から始まる。

木村仁は、キリスト教会牧師が本職であったため、社会学的、精神医学的、人格医学的な考察を中心に、各学派の研究者の指導を受けながら、人間理解のために様々な学問を学び、「人間とは何か」を探究し続けてきた。

人間に大きな影響を与えるものは自然環境や人間関係における精神環境であることが明らかとなり、これらの基礎的人間探求を基盤に実践研究が始まったのである。

教師を指導し、子どもを観察していく中から、疑問に感じたことを一つ一つ学びつつ、試行錯誤を繰り返し、人権教育の基礎となる家族を具体的に育てる実践研究を、愛光（１０年）、ばんけい

(6 年) トモエ (2 2 年) と、 3 8 年間続けてきたのである。

(2) トモエの基礎的人権教育は、「人間とは何か」の探究を基盤として、人間に関わるあらゆる学問分野を総合的に学ぶことから成り立っている。

基礎的で総合的な人間探求とは、人間に関わるあらゆる学問を考察しながら、幅広く深く人間を理解するためのものである。発達心理学・教育学・動物行動学・精神医学・脳生理学・人間関係学・青少年犯罪学・都市工学・その他の様々な学問が、その基礎となる。

(3) 人間探求の最も基本的かつ本質的なテーマは、生命の誕生の意味の探究である。トモエでは、親と教師が常に「人間の生命の謎」「存在の不思議と神秘」を探究することを心がけている。様々な学びによって体得した人間の尊厳を、少しでも具体的に実現できる生活環境を共に意識しながら創造しているのが、トモエの実践である。

(4) 人権教育の基礎的实践は、人間の生命の誕生の根源である「男女の出会い」「愛」「結婚の意味」等を学び続けることから始まる。人間存在の核としての「信頼し合う家族」を考察し、価値体系・倫理体系を模索しながら確立しつつ実践している。

人間の社会構成の核は、家庭である。家庭は、夫婦の信頼で成り立つ。その信頼関係から、ひとりの子どもの生命が誕生する。子どもは、親の信頼により自己存在を確立し、ひとりの人間として育ち、社会に旅立つ。ひとりの生命の存在の基礎的探求から、トモエの人権教育の実践は成立している。

(5) 人格形成の基礎は、脳生理学的考察からいうと、胎・乳幼児期の日々の生活環境から創られる。その後の児童期以降に大きな影響を与えているのが、乳幼児期の環境である。ゆえに、乳幼児期の子どもとその親を基盤として、総合的な人間探求をしなければならない。

(6) 人間の豊かな感性を養うのは、大自然である。人間の感性は、人工的なカリキュラムや教材では育てることが困難である。身体感覚や芸術感覚等、人間のあらゆる感覚を刺激してくれるのが自然環境である。自然の教育力を最大限に生かすことが、基礎的人権教育にとって必要不可欠な要素である。

(7) トモエの基礎的な人権教育とは、人間として生まれたばかりの乳幼児の目、乳幼児の立場から見ようと心がけた実践である。大人は、子どもの価値観を認められず、大人の立場で、大人の価値観を強制的に押し付けてきたといえまいか。自分の視点だけではなく、より幅広くその人個人の人間性を理解するために、男性スタッフ 6 人、女性スタッフ 4 人のチームティーチングによって実践している。

(8) 人は、人を愛し、人から愛されることで、生きることができるものである。お互いに自己を表現し、お互いの表現を受け入れることで、幅広い人間関係を形成する。したがって、素直に自己を表現し合うことのできる精神環境が必要である。トモエでは、自発活動を中心に、思いきり心身を動かして、心も体もぶつかり合える時間を十分に保証している。それが基礎的人権教育の支柱となる。

(9) 「人は群れて生活し、人として育つ」という人間社会共同体的考察が、トモエの実践研究の基盤である。現代では失われつつある「地域社会で共に生きる」ことが、子どもにとっても大人にとっても、非常に重要な要因であることが明らかになっている。トモエでは、かつての地域社会のような、「大人も子どもも共に育ちあう生活環境」を創造しようと試みている。

(10) 現在のトモエは、胎・乳幼児からお年寄りまで、家族が毎日参加できる生活環境である。お互いに補い合い助け合い、日々成長変化し生きることを創造している。トモエの実践は基礎的人間教育であって、幼児教育のみを実践しているのではない。子どもは、大人が日々創り出す生活・精神環境に影響されて育つ。大人は乳幼児から「人間とはどのように育つのか」を、共に生きながら学んでいくのである。

母親、父親達の主体的な参加により、我が子だけでなく多くの子どもや親と関ることにより、乳幼児の理解、人間理解が深められる生活体験ができる環境が実現している。

(11) この実践研究がここまで進められたのは、多くの人たちが人間の無限の可能性を信じて共に歩んでくださった結果である。お互いの人間の可能性を信頼し期待し合い(期待することは待つこと。待つことは、愛といえる)夢を持ち続けた結果、実現してきたのであり、感謝である。

今後も、多くの人たちの協力で、「胎・乳幼児と親を基礎とした人間探求の実践」が継続できることを祈る思いである。「人間が可能性に満ちた素晴らしい存在であることを証明」するために、今後も多くの人の参加によって、この実践研究が進められることを心から願っている。

(12) この報告書は、トモエの実践研究の現時点での中間報告である。この報告書を多くの人やトモエで生活体験した人たちに検討していただき、足りない部分を補ってもらい、より幅広く、より深い実践報告としてまとめたいと願っている。「基礎的で総合的な人間研究」は、人間の永遠の課題であり、尽きない研究問題である。

この報告書によって、今後多くの方が「人間の謎・不思議・神秘などの人間探求」「基礎的人権教育研究」を深め、実践研究がより世界に広がり、人間の素晴らしさが証明され、幸せを創造する人が一人でも増えてくれることを望んでいる。

人間の尊厳が具体化される人権教育の実現のために、今後も多くの人たちと共に歩めることを願っている。